

論考

## 高校魅力化の展開の事例研究

### ——島根県立吉賀高等学校の試行錯誤と問い直しに着目して——

青山学院大学 樋田大二郎

#### 1 終わらぬ問い直し——吉賀高校魅力化の原動力——

島根県立吉賀高等学校の魅力化の事例は自己を問い直し続ける再帰的教育改革の事例（樋田有一郎二〇二二）であり、次の特徴をもつ。

①吉賀高校は普通科教育とは何か、自分たちの使命は何かを常に問い続けている。

②吉賀高校は試行錯誤を繰り返しながら自らを問い直し、問い直した結果に応じて具体的な方法を試行錯誤している。実際、高校魅力化のスタート時、吉賀高校は中高一貫の充実と音楽活動によって魅力を高めようとしていた。しかしその後、聞き書きを実施したことをきっかけに地域の特色を活かした教育（地域課題解決型学習）に取り組むようになり、やがてキャリア教育を根幹に据えたアントレプレナーシッ

プ教育を様々な試行している。

③試行錯誤と問い直しの結果として、吉賀高校の取り組みは住民を巻き込んだ（地域活性化を伴う）地域学校協働へと進んでいる。

④吉賀高校は学校、地域が自分たちを問い直すだけでなく、生徒も自分自身の学びの目的と方法を問い、授業作りをするキャリア教育（地域課題解決型学習）へと発展している。

吉賀高校の事例は先行事例を模倣したり文科省の提唱を後追いつた実践ではない。

二〇二二（令和三）年の中央教育審議会答申が「地域社会に関する学科」といったモデルを提唱（中央教育審議会二〇二二）するよりも前に地域社会を学び地域社会に関わることを試行錯誤している。さらに

二〇一六（平成二八）年の中央教育審議会答申が「社会に開かれた教育課程」やその方法としてカリキュラム・マネジメントを提唱（中央教育審議会二〇一六）するよりも前から、様々に試行錯誤している。

二〇一六年答申では「①……よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。②（これからの子どもたちの）資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。③教育課程の実施に当たって、……学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。」（中央教育審議会答申二〇一六・一三―二四）としているが、二つの答申以前からそして今も吉賀高校は、高校教育を問い直し、高校と地域の関係を問い直し、試行錯誤している。

模倣や後追いではない試行錯誤をくり返す吉賀高校は文科省がカリキュラム・マネジメントの方法として例示するPDCAサイクルから、結果的に（意図したわけではなく）外れた実践をしている。吉賀高校がリアルタイムで社会に開かれ続けていること、および、教育を問い直し続けていることが原因である。吉賀高校の実践は昨年は一昨年とは違う取り組みをした。そして今年も昨年とは違う取り組みをしている。それだけではない。地域や生徒の学びの状況に合わせて年度途中でも取り組み内容を変えている。第二二代渡部俊郎校長へのインタビュー（『地域人材育成研究』第5号所収）では、教育委員会と高校との関係の変化によって、その年に新たな取り組みが生まれたことが語られている。試行錯誤と問い直しというPDCAサイクルから外れた実践は、よい意味で計画性にとらわれず、よい意味で手順にとらわれない実践である。

吉賀高校は島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」に開始時点から参加している原8校のうちの1校である。同事業は高校だけではなく、地域も事業の実施主体となることや地域の特色を生かした教育を行うことを条件としており、地域と学校がウィンウィンの関係を構築する地域学校協働を促進する事業である。同事業は今、日本中に広まっている高校魅力化の原点であり、地域学校協働の原点である。

吉賀高校の高校魅力化の試行錯誤や問い直しは混乱を伴って始まった。高校魅力化は地域が高校存続のために介入する際のマジックワードであり、高校が地域による支援を受け入れやすくするマジックワードである。二〇一一年のスタート当時の高校魅力化や地域学校協働は今日よりもっとマジックワード的であり、具体性や計画性は乏しかった。高校と地域にとつて予想しなかった改革であった。それ以前の誰が、町から派遣されたコーディネーターが職員室に机をもつと予想しただろうか。誰が、普通科高校の生徒が町民と協働して起業すると予想しただろうか。誰が、現役高校生が当たり前のように地元の町に貢献すると予想しただろうか。誰が、成績の良い生徒ほどUターン志向が強くなると予想しただろうか。

吉賀高校の高校魅力化のスタートでは、理想や理念、マニュアルがないまま、ローカルな事情を色濃く反映した手探りの試行錯誤が行われた。そして、始めてみると、高校魅力化の改革は広く深いものであった。以来、吉賀高校は何をしたらいいかを問い続け、それだけでなく、そもそも何をしたらいいかを問う自分は何をしたいのか、いったい吉賀高校とは何者なのか（どのような存在なのか）を問い続けている。



吉賀高校の場合は、「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」という主旨は明確だが個々の目標や方法は高校任せの事業に参加したことが吉賀高校の終わることのない問い直しへの扉を開いた。しかしその成果は豊かであり、統廃合回避の道が開かれ、出口指導の先までを視野に入れた進路指導や新しいキャリア教育、新しい「おらが高校」(＝地域学校協働)が生み出されることとなった。

本稿はこの後、高校魅力化初期の元校長先生へのインタビュー結果(『地域人材育成研究』第5号所収)および、収集資料から吉賀高校の高校魅力化初期の試行錯誤の内容とそ中で現れてきた「問い続ける」という方向性を検討する。

- ・ 第一八代太田肇校長(二〇一〇年度～二〇二二年度)
- ・ 第一九代齋藤雅典校長(二〇一三年度～二〇一五年度)
- ・ 第二〇代熊谷修山校長(二〇一六年度～二〇一七年度。ただし、二〇一七年度～二〇一八年度に第一八代太田校長の下で教頭として吉賀高校に勤務し高校魅力化に取り組んだ経験がある)
- ・ 第二一代渡部敏郎校長(二〇一八年度～二〇二〇年度)

## 2 吉賀町の歴史、産業、文化

吉賀町は島根県西部岩見地区の山々に囲まれ、自然豊かな中山間地域に位置する。高津川とその支流に沿い平地が開けている。吉賀町のホームページに以下のように紹介されている。

「この地域は、古くから吉賀地方と呼ばれ藩政時代は吉賀三領

「上領」「中領」「下領」に属し、参勤交代にも使われた主要街道筋で宿場町でもありました。受け継がれてきた多くの伝統芸能や文化資源があり歴史の重みを感じさせます。また、当地域の気候と清水により生み出される美味な米は、藩主の食する御米として微用されたと言われており清流に恵まれた土地でもありました。」

〔吉賀町の概要〕『吉賀町ホームページ』二〇二二年八月一四日閲覧 <https://www.town.yoshikaga.jp/about/shoukai/>

高津川は「清流日本一」に何度も選ばれている川であり、高津川とその支流沿いに集落が広がっている。高校のすぐそばを流れており、高校生たちのアントレの授業では高津川に関わるテーマがたびたび選ばれている。

交通は、中国自動車道が町内を走り、町内に六日市インターチェンジがあり交通の便が良い。この交通の便を見込んで町内に自動車会社の大きな下請け企業が二社立地している。車での所要時間は萩石見空港から国道で一時間強、広島駅からだと高速で一時間半ほどの距離である。ただし、卒業生の住まいを見ると、県内や近県の大学や専門学校に進学する場合は下宿になる。

平成の市町村合併に際して、島根県からは鹿足郡四ヶ町村（津和野町、日原町、柿木村および六日市町）で合併して一つの町となるように提案された。当初は提案の方向でやむなしという雰囲気になった。しかし、町名と本庁舎の位置を巡って混迷し、最終的に津和野町と日原町、そして六日市町と柿木村が合併することとなった。新町名は、一般公募の一次選考で「吉賀町」のほかにも「高津川町」、「水源町」が残ったが、この地域は古くから柿木村、六日市町を合わせて「吉賀地方」と呼ば

れており、住民が吉賀という呼称になじんでいたことから、「吉賀町」が新町名に選定された（六日市町史編纂委員会二〇〇七・五一九―五二八）。

旧柿木村は有機農業で有名な地域で、住民は有機農業に誇りをもっている。多くのＩターン者が旧柿木村に移住して有機農業を行っている。なお、吉賀高校の寮は柿木の食材を用いた食事が安全でおいしいことを県外生募集の目玉の一つにしている。

旧六日市町地区は、前述のようにインターチェンジがあり、高速道路関係の会社や広島に本社のある自動車会社の下請け企業がある。下請け工場では外国人労働者が多く働き、吉賀町は県内でもっとも外国人（労働者）の比率が高い町となっている。ただし、この下請け会社は高卒就職する会社とは見られておらず、吉賀高校生の新卒就職は少ない。吉賀高校生は町内に希望する就職先がほとんどなく、高等教育機関も看護学校が1校あるだけなので、就職進学のために高卒後にいったん町外に出る。卒業生のＵターンの事例は多いが、家業を継ぐ世代や親の世話をする世代のＵターンが中心である。

文化面では、東京スカイツリーの設計で知られる澄川喜一氏が吉賀町の出身であり、町内にいくつかのオブジェがある。そのうちの一つは吉賀高校の正面玄関横に置かれている。また、ファッションデザイナーの森英恵氏も吉賀町の出身である。町民は森氏の蝶のデザインは子ども時代にみた原風景をモチーフにしていると語っている。そのほか、吉賀町には八久呂太鼓、石見神楽（抜月神楽、白谷神楽、黒淵神楽、獅子舞）の伝統芸能が引き継がれており、高大交流の中で白谷神楽を見た大学生は怖い場面で逃げ惑う迫力であった。白谷神楽のメンバーによると日本各地で公演する機会があり、後継者も育っているという。

### 3 吉賀高校の沿革

地方郡部には今でも「おらが高校」という感覚があるが、吉賀町住民にとって吉賀高校はまさにおらが高校となっている。「おらが高校」の経緯は吉賀高校の沿革に見ることが出来る。吉賀高校の開校までの歴史を見ると、新制高校発足時に地元が費用を負担し分校を開校した。その後、以下に見るおよそ二〇年間に及ぶ地元の期待と精力的な働きかけと支援で高校に格上げされることとなった。

昭和二三（一九四八）年四月に学校教育法に基づいて新制高等学校が発足し、島根県では同年に三五校が開校した（島根県教育委員会・島根県公立高等学校長会 一九六八・九九）。吉賀町内には高校は開設されずに、益田農林高校七日市分校、津和野高等学校六日市分校、益田産業高等学校柿木分校の三つの分校が設置された。この時点では吉賀高校や吉賀分校という名称はない。

『六日市町史 第三巻』（六日市町史編集委員会、二〇一七）の記述から吉賀高校の沿革を見てみよう。

分校のうちの一校は益田農林高校七日市分校であり、一九四八年六月に設置決定、八月に現在の吉賀町七日市地区に益田農林高校定時制（四年）の分校が開校された

新制度により、農村型、勤労青少年を対象とした定時制高校が設置されるようになり、門戸は大きく開かれることになった。七日市分校の設置にあたり、当時の村長松前長三郎は、設置のために素早く精力的に動かれ、長年の悲願であった当地区の青少年教育条件整備に力をそそぎ、同年六月、七日市分校の設置が決定し

たのである。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九一―五九二

認可条件が人件費以外すべて設置町村負担であり、村財政にとっては誠に厳しいものがあり、三十八年独立校となるまで財政負担は続けられた。本校の益田農林高校は二十四年、益田高校と統合し益田高校と改称。二十八年に再び分離独立し益田産業高校と改称され、七日市分校もその度に分校名を改称した。同三十三年、津和野高校六日市分校が七日市分校に統合され、同三十五年、定時制課程と全日制課程となった。

この間、生徒数の増大等で、学習展開上にも支障を生じ、校舎の新築、増築、設備の充実、教職員の配置等々多くの改善がなされ分校として発展を遂げたが、昭和三十八年、吉賀高校として独立校となり十五年間の七日市分校は終わりを迎えた。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九一

吉賀町内にあつた残りの二つの分校は津和野高等学校六日市分校と益田産業高等学校柿木分校である。津和野高等学校六日市分校は一九四九（昭和二九）年に、六日市地区に開校された。

昭和二十九年四月一日、六日市町、蔵木村を中心とした地区住民の強い要望と財政的負担により、六日市町立公民専修学校を母体とし普通課程定時制（四年制）が津和野高校の分校として設立された。

開校当時は六日市中学校の一部を仮校舎とし、同年七月新校舎が竣工した。分校主任外五人の定数で、本校から随時必要に応じ講師が派遣されていた。初年度の入学生徒数は、定員五十人に対して二十七人であった。

昭和三十三年「県立高等学校教育刷新充実計画」が発表され、この基本方針に基づく高校再編計画は、諸事情を勘案しながら、可能なものから逐次実施することとなり、七日市分校と六日市分校は統合され、津和野高校から分離して、益田産業高校七日市分校となり、一期の卒業生を送り出しただけで、わずか四年間という短い六日市分校の歴史は閉じられた。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九一

前述のように吉賀高等学校の誕生は一九六三（昭和三八）年のことであつた。

分校発足以来進学生とも次第に多くなり、定時制から全日制へと課程の変更、校舎の新改築、設備の充実、教職員の適正な配置など、学校の条件が整って三十二年頃本校から分離独立、高校昇格への気運が高まった。三十四年全日制高等学校設立期成同盟が結成され、結束して実現運動を展開した。その結果、昭和三十八年四月一日、益田産業高校から分離独立し、柿木分校と統合して島根県立吉賀高等学校が誕生した。

出典：六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』、五九三

吉賀高校柿木分校は一九六九（昭和四四）年に吉賀高校本校と統合され、

分校開設から二一年後にこうして吉賀地方唯一の県立高校となった。

吉賀高校の母体となった三つの分校はいずれも地元が要望し、財政負担をいとわずに開校したおらが分校であった。そして、全日制高等学校設立期成同盟を結成し、「結束して実現運動を展開した」結果、おらが高校である吉賀高校が誕生したのであった。

吉賀高校は県立高校となったが、その後も町内の全四校の中学と高一貫（連携型）を形成するなど、「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」以前において、地元地域との密接な関係は続いていた。

#### 4 高校魅力化スタートの頃の吉賀高校の特徴

高校魅力化スタート時の吉賀高校の特徴を見ると、第一の特徴は入学者数が少なく廃校の危機にあつたことである。町民の間では危機感には十分には共有されていなかったが、少なくとも高校と町は強い危機感を抱いていた。

一番は、「この高校がなくなるんじゃないか」という思いです。この地域は、……生徒の数が減っていくだろうという予測が出ていました。この地域には、津和野高校があり、吉賀高校があり、さらに益田には四校も高校があるという状況です。普通に考えると、まず、一学年一学級の吉賀高校がなくなるだろうと思います。出典：『第一九代齋藤雅典校長インタビュー』『地域人材育成研究』第5号所収。以降、「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」とする。

第二の特徴は、学習意欲が高いとは言えず、学習習慣が身について

いるとも言えなかったという問題の存在である。

「吉賀高校は、人口が多い時代にできた高校です。その頃は、「成績上位の人は津和野か益田の高校に行きなさい。そうしないと成績下位の子が入れる学校がないから」、そういう声があつたようです。スタートがそうですから、子どもたちも荒れていた時期があつたと聞いています。ですから、私が着任した頃、地域の方に、「そりゃ地元の学校だから、校長先生は吉賀高校に来さしてくれって言っうけど、でも、あそこじゃあ行かせられんよ」と言われる方もおられました。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

吉賀高校の生徒の多くは、学力はそれほど高くなく、学習意欲も高くはないので、この魅力化の動きを通して、学習動機が生まれて、学習意欲が高まるとよいという思いでおりました。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

課題は、やはり家庭学習の習慣が身につけていない生徒が多いことですね。「学習につなげたい」と思うのは、裏返して言えば、「家でそれほど勉強できていない」ということです。PTAの会で保護者さんと話しても、「家で、そりゃうちの子、勉強すりゃあせん」って言っう方が多かったですね。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

その前の学年は（入学者は）少なかったです。二〇何人、いよ

いよ（統廃合の）ギリギリの所だったかな。その段階ではまだ中高一貫教育でみんな入ってくるみたいな流れだったですかね。それで「勉強せんでもいいや。」みたいな雰囲気がありました。

出典：「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」「地域人材育成研究」第5号所収以降、「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」とする。

第三の特徴は、生徒の学力の多様性や生徒指導上の問題が存在していたことである。高校魅力化は、これらの問題の克服に追い風となった。

……我慢できない、また、周囲に対する思慮深さが無い、そうしたことから、平気でいろんなことをしてしまうということがありました。魅力化とは別のことですが、生徒指導面では多くの教員が苦勞をしたんですね。落ち着いて授業がうまくできないという状況も、ちらほらあつたですね。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

……生徒指導上のいろんな問題もありました。そうした中でやっていって、だんだん落ち着いてきたときに、魅力化の中でいろいろとやってきていることを、最近言われている「学ぶ意欲」、文科省の言う「学ぼうとする力」につなげたいと考えていました。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

吉賀高校の生徒の学力は、ほんとうに多様で、中にはセンター試験で七〇〇点台をとった子だとか、推薦ではなくて一般受験で国立大学に合格していく子だとか、多くはないけれど、そういう子もいます。かたや、数学でいうと九九も怪しい生徒もいます。

こういう非常に多様な生徒みんなの資質を高めることが、吉賀高校の使命です。

出典：「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」

第四の特徴は、島根県で当時中高連携を行っている高校はわずかしかなく、そのうちの1校であったことである。中高連携では教員の交流や部活動の交流、イベントの交流などが行われ、中学生に吉賀高校のことを知ってもらうことができた。吉賀高校は、次節で見る生徒数減少による閉校回避の方法として中高一貫（連携型）を推進し、多様な取り組みを行った。

第五の特徴は吉賀高校は島根県で唯一の一学年一クラスの小規模校であったことである。このことは、教科の教員の確保（物理など）を困難にさせるなどの不利をもたらしたが、意思決定や授業設定の小回りがきくという利点ももたらした。教師集団の高校魅力化への理解も比較的容易であった。

第六の特徴は他の中山間地域の高校にも通じることであり、三節で見た沿革にもあらわれているが、住民にとって吉賀高校は「おらが高校」であり、「聞き書き」を始めとした高校魅力化をきっかけとして吉賀高校に対して大きな関心を寄せたことである。

## 5 生徒数減少と閉校

島根県では二〇一一年度（平成二三年度）から「離島・中山間地域





の高校魅力化・活性化事業」が開始された。吉賀高校は事業の対象となった原8校のうちの1校である。

筆者が初めて吉賀高校を訪問したのは二〇二二年度末の二〇一三年三月一四日であり、県外生募集の聞き取り調査を行うためであった。当時の太田肇第一八代校長（二〇一〇年度～二〇二二年度）が離任する半月前のことであった。前述のようにこの当時、統廃合の危機にあつたのは生徒数が減少したからであるが、吉賀高校は、生徒数減少を単に高校がなくなる問題とせず、地域が疲弊する問題という視点から捉えていた。

### 5-1 地域活性化問題としての高校存続——生徒数減少と過疎化のスパイラル

高校の閉校が過疎化に与える影響について、吉賀高校と吉賀町では資料一のように、二〇一二年度という高校魅力化の初期段階から、高校魅力化を教育問題としてだけでなく、経済問題、文化問題、地域の疲弊（社会問題）、絆（社会関係）等の問題としてとらえていた。吉賀高校と吉賀町は吉賀高校廃校の影響を負うスパイラルとして構造化してとらえていた。そうすることで町民の危機意識を高めようと試みていたものと考えられる。地域人材育成研究会が、高校を地域の生命線としてだけでなく、地域活性化の最前線や地域活性化のエンジン（樋田有一郎二〇一四）としても描いて好循環のスパイラルで捉えていたのは対照的である。

①子どもの機会減少（受け皿が無くなる。選択肢が少なくなる。）

高校に行けない者が出る。）

← ②親の負担増（教育の負担が増加する。親子の時間が無くなる）

← ③人材の不足（小学生の身近なモデルが無くなる。地域と子どもとの関わりが減る。地元就職や神楽、盆踊りなどの吉賀町を担う人が減る。Uイターンにとつての魅力が減る。）

← ④経済の衰退（先生がいなくなり地元商店街の売り上げが減り七日市が寂れる。長期的に町内の消費が減少する。ゆうちょ、銀行支店が統合される。）

← ⑤文化の衰退（町内のサークル活動が衰退する。ふるさとの体験をする機会が減少する。吉賀町の良さを知らずに育つ。）

← ⑥地域の疲弊（高校が廃墟になり、治安が悪化する。若者がいなくなり、町の元気がなくなる。子どもに自信をもって住みなさいと言えなくなる。自分なら住み続けようと思わない。）

← ⑦絆の喪失（ふるさとの友が町外になり、つながりが無くなる。つながりを求めない。Uイターンのみの町になる（無縁社会化する）。町民と子どもが関わる時間が減少する。同窓会が無くなる。）

← ⑧人口減少（人口が減少する。高齢化が実質的に進む。Uイターン減少、町外流出、空洞化、親世代の減少。）

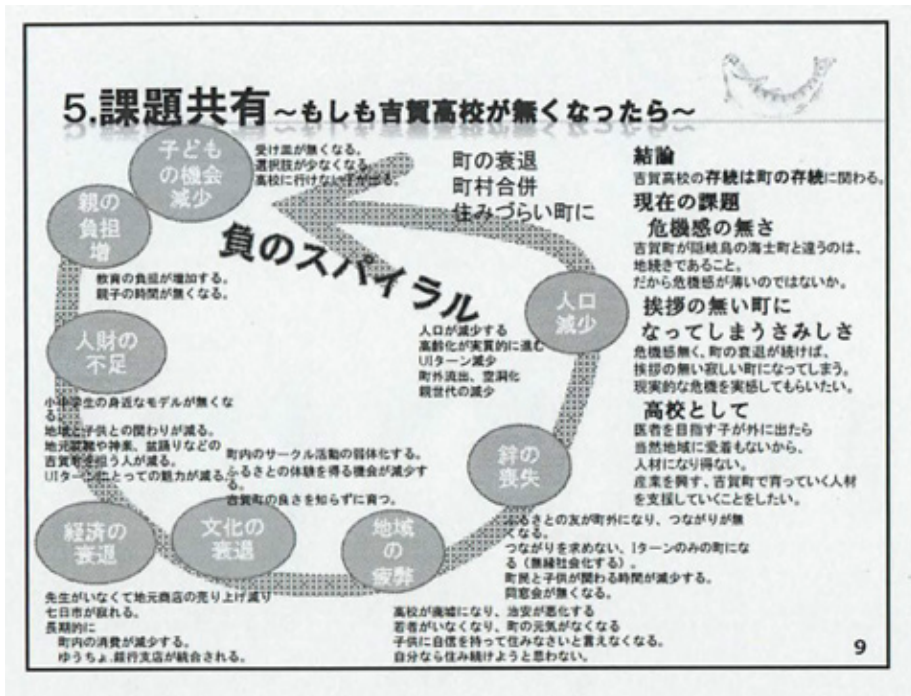


図1. 生徒数減少と負のスパイラル 出典:吉賀高校,2013 a,「5. 課題共有～もしも吉賀高校が無くなったなら～」 『島根県立吉賀高等学校(1期)「離島・中山間地の高校魅力化・活性化事業実施報告』

←  
①そしてそれらの結果としてのさらなる子どもたちの機会減少(受け皿が無くなる。選択肢が少なくなる。高校に行けない者が出る。)

吉賀高校、二〇一三a、「5. 課題共有～もしも吉賀高校が無くなったなら～」  
『島根県立吉賀高等学校(1期)「離島・中山間地の高校魅力化・活性化事業実施報告』(※2013年訪問時の収集資料)。

吉賀高校の「吉賀発 サクラマス・プロジェクト」は負のスパイラルの結論として 吉賀高校の存続は町の存続に関わる。危機感のなさが現在の問題である。危機感の無いまま、町の衰退が進めば、挨拶の無い町になってしまう。危機感をもって貰いたい。産業を興す、吉賀町で育つていく人材を支援していくことをしたい、としている。

どのようにしてサクラマス人材を育てるのかというビジョンは、この時点ではふるさとを知りふるさとを愛する教育に留まっており、地域活性化のエンジンとしての高校への目覚めや、地域課題解決型学習による当事者性の育成や、地域貢献、起業の体験的学習は二〇一二年度開始の「聞き書き」が発展する中で意識されていくことになる。

5-1-2 町外高校進学の実態

表1で生徒数の推移を見てみよう。吉賀高校は二〇〇三(平成一五)年までは定員八〇名、一学年二クラスの高校であったが、入学者数の減少が進み二〇〇三(平成一五)年には二三名、二〇〇四(平成一六)年には二五名となった。そして、二〇〇四年度から四〇人一クラスの

表1. 吉賀高校の入学者数と町内入学率の推移

年度	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011
入学者数	42	46	23	25	43	44	35	40	38	33	27
年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	
入学者数	33	31	27	33	27	37	40	32	40	33	

出典：吉賀高校、2013 d、「2013年3月地域人材育成研究会訪問調査時の説明資料」と『めたせこいあ』（学校通信）の各号

※中高一貫教育（連携型）の導入時期は吉賀中学がH13年度、六日一中学・蔵木中学がH15年度、柿木中学がH18年度

※県外生募集の導入時期 平成27年度（同年度から中高一貫の特別選抜枠を40人定員の50%に縮小）

定員となった。

入学者数の減少が進んだ背景には少子化のほかに地元中学からの入学率が下がり（町外高校への進学率が上がり）、その後、入学者数は持ち直すものの、吉賀町内から吉賀高校への進学率はおよそ50%と、中高一貫教育導入後の目標としている80%よりは低い値で安定した。

吉賀町からクルマで一時間ほどの沿岸部の益田市には高校が四校あり、隣の津和野にも県立高校がある。吉賀高校は進路保障や部活動だけを見ると、それらの高校よりも不利であると見なされていたので、前述のように統廃合の対象となる可能性が高い高校であると危惧されていた。実際、高校魅力化の事業がスタートした二〇二一（平成三三）年度には二七名まで減少している。その後、二〇一四（平成二六）年度と二〇一六（平成二八）年度にも入学者が二七名にまで減少している。

当時の島根県の統廃合検討基準では、吉賀高校の場合は三学年合計で六三人（中山間地の一クラスの定員を三五人で計算して全校の生徒数の五分の三）に満たないことが閉校の目安であった。太田校長の町内の小学生数に基づいた予測（町内中学卒業生の50%が吉賀高校に入学するという試算）（吉賀高校二〇一三 d）では、吉賀高校の三学年合計生徒数は二〇一八（平成三〇）年度に六八八人、二〇一九（平成三二）年度には六四人、二〇二〇（平成三三）年度には六六人となる恐れがあった。

しかし実際には次に見るように、高校魅力化の取り組みを始めた様々な取り組みが功を奏し、生徒数は二〇一八（平成三〇）年度に一〇〇人、二〇一九（令和一）年度には一〇四人、二〇二〇（令和二）年度にも一〇九人を確保できた（『めたせこいあ』（学校通信）97号、109号、121号の各号より）。

〈生徒数（三学年合計）の予測と実際〉

二〇二二年度時点の予測

二〇一八年…六八八人

二〇一九年…六四四人

二〇二〇年…六六六人

実際

二〇一八年…二〇〇八人

二〇一九年…二〇〇四人

二〇二〇年…二〇九人

生徒数で見ると、吉賀高校は大いに「魅力的」になったと言える。本稿は、このあと、吉賀高校がどのようにして魅力的になったのかを考察する。

### 5-3 町外高校進学理由

第一八代太田肇校長（二〇一〇年度～二〇二二年度）の当時、吉賀高校は町内中学生が町外高校へ進学する理由を次のように分析していた。

- ① 理系の進路対応ができる高校へ進学する。（吉賀高校では、理科の教員が生物担当の一名しか確保できず、物理・化学への対応が難しい。）
- ② 吉賀高校にはない部活動を求めて他校へ進学する。（野球、バ

スケッチボールなどの体育系部活動や、吹奏楽などをするために他の学校へ進学する）

③ 近隣の他の普通科高校へ進学する。（進学に関してより実績のある大きな高校へという意識は根強く残っている。）

④ 推薦により経済的な得点を得て、私立高校へ進学する。

⑤ 普通科以外の高校へ進学する。

出典：吉賀高校、二〇二〇、「中学生の進路選択と中高一貫教育の課題」『中高一貫教育基本構想（H二三年四月）』

これら五つの理由のうち、①と③（と⑤）が高校の進路指導に関わる理由であり、②が部活動、④が経済性に関わる理由である。高校魅力化を経験する以前の高校教育を評価する基準は、生徒自身も高校も進路の幅の保障（高い進学実績）、部活の保障、経済性の三つが大きな評価基準だったのである。

吉賀高校はこのように分析された町外高校進学理由に対応するために、二〇一〇年の時点では学習指導・進路指導、部活動指導を強化しようとしていた。また、経済性に関わっては、吉賀町の助成でスクールバス制度を整えた。さらには、後述するように中高一貫（連携型）のショーウィンドウ効果によって生徒数減少に歯止めを掛けようとした。

### 6 吉賀高校の高校魅力化スタート時点の試行錯誤

太田肇第一八代校長（二〇一〇年度～二〇二二年度）は吉賀高校が島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」を受け入れ、

スタートさせた時の校長である。

島根県の離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業は、地域の特色を活かした教育を行うことを条件の一つとしている。島根県の高校魅力化事業のスタート時点では、これに部活動の強化、進路指導の強化を加えたものが魅力化の三本柱と考えられていた(二〇一三年七月、島根県立飯南高校飯塚校長へのインタビューより)。これに対して、吉賀高校は既に開始していた連携型中高一貫教育の強化を柱にしたのが特徴であった。

## 6-1 音楽の町

「離島・中山間地域高校魅力化・活性化の事業」は地域の特色を生かした教育を行うことを要件としている。しかし、吉賀高校の二〇一二年度の高校魅力化に関わる事業は後述するように中高一貫に関わる事業が中心であった。中高一貫に関わる事業は学校制度の特色であったという点で、今日の吉賀高校の地域の特色を生かした教育(地域課題解決型学習IIアントレプレナーシップ教育)の取り組みとは、趣旨が異なっていたと言える。

そして魅力化がスタートした二〇一一年度には、もっと趣旨が異なっていた取り組みを試行していた。高校魅力化によって地域の特色を作ろうとしたのであった。二〇一一年度の高校魅力化は「吉賀を音楽の町にしたいとかいうような壮大な構想」で行われていたのである。このことについて第二〇代熊谷修山校長はインタビューの中で次のように語っている。

そうそう、吉賀は一人コーディネーターで先にいた人が、私が赴任した時にはもういなくなっていたんだけど、彼が吉賀を音楽の町にしたいとかいうような壮大な構想があって、魅力化も音楽部みたいなのを作ろうというので、ドラムだとかギターだとか、ごそつとそのお金で買っていると思うんです。だから私が教頭で行って整理したのは、その音楽部の位置付けでした。多分校内の十分な合意もなくやっていると思うんです。「とりあえず、そうしよう。」みたいな、まあ、一部の人の意見で、みんな買って、買った方がいいけど、「音楽部って何するの?」っていうような、行つた時にはそういうレベルだったです。だから一応魅力化の中で音楽部の位置付けというのをちよつと整理しました。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」

筆者らは全国の高校を訪問している中で、担当者が異動すると取り組みが続かなくなることがあると聞くことがある。学校や地域が一体で取り組む高校魅力化では取り組みが続かなくなるとは少ないのだが、吉賀高校の場合は、高校の力で新たに地域の特色を作ろうという構想を立てたが、担当者の異動と共に構想がしぼんだ。

「吉賀を音楽の町にしたい」という実践は、試行錯誤という意味をもつ実践であり、高校教育の役割を問い直すことに資する実践であった。音楽部の試行錯誤の反省は、二〇一二年度に開始された聞き書きを継続し発展させる考慮に反映されている。

## 6-2 地域活性化についてのビジョン——サクラマスプロジェクト——

吉賀町は地域人材育成（「将来的に地域を支える人材の育成」）を目標に掲げている。吉賀高校の高校魅力化・活性化事業の取り組みは吉賀町の地域人材育成プロジェクトであるサクラマス・プロジェクトと関係づけられて実施されている。

サクラマスはサケ目サケ科に属する魚で、ヤマメと同じ種類の魚であるが、河川に残留した個体がヤマメと呼ばれるのに対して、海降した個体は成熟し生まれた河川に帰り、サクラマスと呼ばれる。残置型のヤマメが比較的小型のままであるのに対して、サクラマスは大きく育つ。吉賀高校は地理的条件から一度は町外に他出した卒業生が、高校時代の学びに導かれてたくましく育って吉賀町に戻り地域に貢献することを高校教育の目標とする。

吉賀地域中高一貫教育を軸に吉賀高校の教育内容をより魅力あるものにするにより、一人でも多くの地元中学生の入学へつなげ、また吉賀生が地域からの支援を得つつ、地域理解と地域への愛着を深めていく活動を通じて、将来的に地域を支える人材の育成を目指す取り組みを展開する。

出典：吉賀高校、二〇一三b、「平成24年度離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業実績報告書」

吉賀町は九年後の二〇二二年時点でもサクラマス・プロジェクトを行っているが、今日の吉賀高校は地域課題解決型学習を行い高校在学中に地域貢献を体験学習し、地域住民とのネットワーク形成を初めとした社会関係資本の形成を行っている。これに対して当時の吉賀町では、

「地域理解と地域への愛着を深めていく活動」という小学校で行われるふるさと学習に近い学習を行うことでUターンを促進しようとしていた。これに対して地域の特色を生かした教育によってUターン促進地域貢献人材の育成につなげるためのビジョンは二〇一二年度に行われた聞き書きから徐々に整理されていく（第一九代齋藤雅典校長へのインタビュー）、「第二〇代熊谷修山校長へのインタビュー」。

### 6-1-3 二〇一二（平成二四）年度の取り組み（第一期二年目）

二〇一三年三月の吉賀高校訪問時に当時の太田校長からいただいた吉賀高校作成の資料（吉賀高校二〇一三b）をもとに、吉賀高校の初期の取り組みを見てみよう。以下の取り組みは第一期三年間の事業期間の二年目の実績に当たるが、実施内容を見ると、中高一貫教育にかかわる取り組みが8つと多くなっていることや、そのうち、①の「中高一貫教育だより」を除く7つの実施内容がイベントとして行われていることが特徴である。

このように第一期二年目は、吉賀高校自体の魅力化というよりも、募集対策と関連付けられた中高一貫教育のイベントを柱としていることが分かる。上述のように吉賀高校は常に高校の閉校の危機意識をもっており、中高一貫は募集対策の重要な手段であると認識されていたものと考えられる。

#### （1）中高一貫教育にかかわる取り組み

- ① 「中高一貫教育だより」の発行
- ② 中高合同水質調査

③よしか塾の開催（町内四中学校の三年生と吉賀高校三年生（進学希望者）が一堂に会して、学習会を実施。吉賀高校卒業生四名と吉賀高校二年生二名が中心となって学習支援を行い、中日には一年生約一〇名が加わって、個別に中学生の学習支援を行った。ここでは、アイズブレイクの時間も作り、大学生・高校生・中学生の交流の場にもなった。）

④中高合同ロードレース（吉賀高校と吉賀中学校の生徒が、共同でロードレースを行った。高校男子の部（一二キロ約五〇名）に中学生男子六名が参加し、高校女子の部（八キロ約四〇名）に中学生女子五名が参加）

⑤科学フェスティバルの開催（町内で開催された「きん祭・みん祭・農業文化祭」で中高理科教員による化学実験室の開催。町内の五小学校の児童を招待し中高理科教員による化学実験室の開催。）

⑥中高合同地域巡検

⑦合同柔道教室

⑧教員研修の実施（中学校と高校の理科教員が集まって、化学実験室の実施に向けた研修会を実施。また、夏休み等で、町内五小学校の教員も交え、「サイエンス・キー・スクール」のための理科授業の研究会を実施。）

（2）学校行事の取り組み

⑨よしか祭・音楽祭の開催

「よしか祭」に、町内中学生約一〇〇名（中学校により三年生以外も参加）を招待し、中学生による合同合唱の発表、高校生音楽部による演奏会を行った。



- (3) 教育内容に関わる取り組み
- ⑩ 各種キャリア教育講演会の実施
- ⑪ 地域活動の展開
- (4) 部活動に関わる取り組み
- ⑫ 校外遠征の実施
- 運動部の県外遠征などにかかるバス借上げ
- ⑬ 活動実技レベルアップ事業の実施
- トレーニングコーチを招聘、フィジカルトレーニングコーチを招聘、高校トップチームを招いて、バレーボール教室、写真部作品のパネル化と町内小中学校、看板制作会社の方を、指導者として招聘。
- (5) 生徒募集・魅力PR
- ⑭ 学校案内の作成
- ⑮ 「広報吉賀」内での『サクラマス・プロジェクト』PR紙面の確保
- ⑯ ノベルティの作成
- ⑰ ホームページの更新
- ⑱ 学校PTA総会での広報活動
- (6) その他
- ⑲ 部人材の活用
- サクラマス・コーディネーター人材配置
- ⑳ 「吉賀発サクラマス・プロジェクト助成金」

○通学バス助成金

○ビジネス手帳購入補助(二〇二三年度用)

以上、吉賀高校作成の資料(吉賀高校二〇一三b)をもとに具体的な取り組みを列挙したが、初期の吉賀高校の高校魅力化の取り組みは多岐に渡っていること、部活動も含めて中高一貫の充実に重点が置かれていることが特徴的である。高校魅力化に取り組む残りの7校では、他校では進路実績の向上、地域課題解決型学習、部活動の活発化を高校魅力化の三本柱としていたのとは対照的である。吉賀高校の取り組みは中高一貫校であることを活かした取り組みであった。

吉賀高校の魅力化ではその後、募集対策が強調される中高一貫のイベントは徐々に後景へと退き、地域課題解決型学習(聞き書きを原点とするアントレプレナーシップ)が前面に現れてくるが、そのまえに、次節で吉賀高校は前述のように分析された町外進学の原因に、対応するために二〇一二年度においても受験学力向上の指導に力を入れていたことを見ておきたい。

7 補習、習熟度別授業等

吉賀高校は上述の高校魅力化の取り組みと並行して、進学指導の充実によって入学人数を増加させようとした。このことも吉賀高校の試行錯誤であり、自分を問い直す作業の一つであった。

二〇一二年当時の高校魅力化原8校では、地域の特色を生かした教育(や地域課題解決型学習)、部活動、進学指導の三つが魅力化の柱と見なされる傾向があった。吉賀高校の場合は上述のように高校魅力化



表2. 国公立大学合格者数の推移

出典：吉賀高校 2013 d

1993～1997	1998～2002	2003～2007	2008～2012
3人	5人	10人	20人

開始以前には中高連携を募集対策の柱にしてきた経緯があった。また、次に見るように学習環境の改善や進路指導の改善にも大きな力を入れてきた（吉賀高校 二〇一三（a））。

学習環境の改善では、多様な生徒への対応として、習熟度別授業（英語・数学・国語）を実施。補習については一・二年生を対象に「夏期補習（前・後期）」、三年生を対象に「平日補習」「夏・冬・季補習」を実施。補充授業も行っており、一・二年生を対象に「夏期補習」時に開講。さらに、個別添削指導を一年次から必要に応じて対応。

受験生への学習指導にも力を入れており、①進路保障のための取り組みとして、平日補習（放課後一、二限）が六六日（六月～一月）。休日（土曜）補習が一七日（六月～一月）。夏期・冬期補習が一三日にも及んでいる。さらに、平日放課後学習会を平日補習と並行して実施。

こうした学習指導、受験指導はいわゆる進学実績として結果に表れていた。国公立大学合格を進学実績の指標とすると表2のようになる。

二〇一二（平成二四）年度末現在で、島根県立大学に七名、山口大学に四名の吉賀高校卒業生が在学していた。また、二〇〇七（平成一九）年度からは継続して、毎年三～五名が国公立大学に合格するようになった。卒業生が四〇名未満であることを考えると低くは

ない進学実績である。

8 二〇一二（平成二四）年度の新しい取り組み  
——平行して実施された試行錯誤——

吉賀高校は、これまで考察してきたように中高一貫教育の強化と部活動と学習・進路指導の強化によって入学者数確保を達成しようとした。二〇一二年度も中高連携を強化して、例えば学校祭の「よしか祭」で中学生が聴講する教育講演会や中学生が発表する音楽祭を実施した。

しかし、二〇一二年度はそれ以降のアントレプレナーシップ教育、地域課題解決型学習、都鄙間高大協働探究活動（東京の大学生との地域課題解決学習型の協働活動）につながる学習活動が始まった年でもある。

8-1 コンソーシアム等

島根県離島・中山間地域高校魅力化・活性化事業は、原則として町内に県立高校が一枚しかないこと、地域を中心にした事業実施組織をつくることを助成の条件としていた。助成金は高校にはなく事業実施組織に対して助成される。吉賀町は事業実施組織として吉賀高校魅力化・活性化推進協議会を発足させ、その実務面での検討会議としてプロジェクト会を組織した。高校魅力化の実践を検討する場であり、毎月開催される。発足当時のメンバーは町役場企画課・町教委、高校であった。

8-12 東京研修

町からの助成を得て「東京研修」が始まった。東京研修は、プロジェクトの中で発案されたものであり、高校一年生が秋に三泊四日の旅程で東京を訪問する。地元の吉賀町を外から見つめ直す機会となることを目指したものである。第一回から今日に至るまで吉賀町が財政支援を行っている。

地域活性化・振興に貢献できる人材育成を目指し、首都東京周辺の民間企業、施設等での実習体験等の学習活動を通して、自らの生まれ育った地域との対比の中で、生徒一人ひとりの地域発展活動への興味・関心を喚起し、主体的な進路選択のできる能力を持たせる。地下鉄などの公共交通機関を利用することで、都市部での生活も体験させる。

出典：吉賀高等学校、二〇一三、『吉賀発 サクラマス・プロジェクト』  
二〇二二年度高校魅力化研修会資料

東京研修はやがて青山学院大学および法政大学との都鄙間高大協働探求活動へとつながることとなった。二〇一三年度から校長に赴任した齋藤雅典校長が、東京研修の一環で東大の赤門見学をすることに疑問を感じ、『地域人材育成研究会』に高校生と大学生（青山学院大学生、法政大学生）の交流事業を提案したことで開始され、その後段階的に発展した。開始時点では高校生と大学生が相互に相手の視点で自身や自分の町を見ることに力点が置かれた。詳細は後述する。

8-13 聞き書きと聞き書き甲子園

聞き書きは吉賀高校の高校魅力化の骨格を形成することになった。以下、聞き書き導入の経緯と聞き書きが切り開いた可能性について考察する。

聞き書きは二〇一二年度に、当時のコーディネーターの発案で一年生を対象に開始された。二〇一七年度からは三年生を通して行われるアントレプレナーシップ教育の一年目として位置づけられ、行われた。

当時、聞き書き甲子園が注目を集めていた。聞き書き甲子園の主催は聞き書き甲子園実行員会（農林水産省、文部科学省、環境省、公益社団法人国土緑化推進機構、NPO法人共存の森ネットワーク）であり、二〇〇二年度に第一回大会が開催され、高校生がおもに「森の名人・名人」から話を聞いた結果を報告する大会である。森林環境教育の一環としてとらえられていた（安藤・興梧二〇一四）。吉賀高校生も聞き書き甲子園の大会に参加している。

日本では、聞き書きという手法は社会学者の桜井厚の影響を受けている（渡辺ほか二〇一八）。社会学では、社会的構築主義という考え方がある。人は語ることで自分の今と過去・未来に意味が与えられるという。社会的構築主義の考え方に立つなら、聞き書きの対象となった地域住民にとっては、自分の人生に意味が与えられ、さらに人生と地域とが関係づけられたと考えられる。

8-4 吉賀高校の聞き書きのねらい

初年度の聞き書きは、一年生の「総合的な学習の時間」の中で行われ、合計時数一五時限を使って、一年生三三名が地域のお年寄りから話を聞き記録を残した(表3)。

聞き書きは、吉賀高校の立場からは「地域の方からも必要とされる学校」となるためのプログラムと位置づけられた。人口六千人台の中山間地域の町で三三人(あるいは三三戸)が対象となったことは、地域住民にとって吉賀高校を身近に感じさせる効果は少なくない。

二〇一二年度の聞き書きのねらいは以下の三点であった。

- ① 温かなコミュニケーション能力を身につける
- ② 自活力とモノづくり・コトおこしのできる能力を身につける
- ③ 地域での生活や特色について深く知る

出典：吉賀高校、二〇一三b、「平成24年度離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業実績報告書」。

一番目に「温かなコミュニケーション能力を身につける」こと、二番目に「自活力とモノづくり・コトおこしのできる能力を身につける」ことをあげていることが興味深い。聞き書きが開始された当初は、吉賀高校は生徒の探究力を高める手段として行われるのではなく、つなげる力や地域課題解決力(自活力、モノづくり・コトおこし)の育成を目標にしており、それらは地元の共同体を生きる歴史を知る営みの

表3. 2012年12月聞き書き発表会発表タイトル一覧(話し手・作品タイトル)

三宅和人さん・仕事と共に歩んだ人生	寺戸忠次郎さん・親から子へ、受け継ぐ百姓
大庭尚さん・60年たった日	末岡正文さん・海外での体験
平田晴子さん・87歳のおばあちゃん	蔵本達則さん・蔵本さんの人生
山根乗教さん・今までの人生	山本幸枝さん・ムシロ編み
中村亨さん・総代の仕事	稲倉千鶴枝さん・自分のためより人のこと
田村正人さん・お百姓さん	村田知さん・竹細工
福江ハツノさん・産婆	大庭寛さん・おじいさんが好きな牛
山田浩さん・蔵板木	斉藤久男さん・斉藤久男さんの昔話
黒谷薫さん・人生において大切なこと	河野孝祐さん・農業と人生について
宗内祥子さん・宗内さんの味噌作り論	宗内金八さん・健康だからこそその92年間
三浦照夫さん・棚田の話	山本利幸さん・八81年間の軌跡
松本正さん・大工という仕事	長藤忠夫さん・今までやった仕事
山下梅子さん・有機農法と今の子どもたち	福原信二さん・神楽の斉藤さん
宗内富美枝さん・昔の仕事	羽野善雄さん・鴨による米作り
藤原一夫さん・ジャクナゲの里について	花崎訓恵さん・天然酵母のパン作り
河野富士夫さん・レストランの仕事	川本隆光さん・どもたちの未来のために
山本正之さん・縄文時代	

中で行われる学びであった。

このような目標に導かれて行われた聞き書きは、初年度の段階で地域活性化や地域住民に対して与える効果があったことが読み取れる。地域住民への配慮や地域住民からの反応については、二〇二二年度の聞き書きの振り返り等に次のように書かれている。

・「生徒に何も話してやらなかった」という人もいた。また、「自分たちが話したこと、経験、伝わらない」というもどかしい思いをされた人もいたようである。

・話し手にとっても充実感が得られることも必要ではないか。(工夫)

・(相手方に)話を聞いてくれたと思ってもらうことも必要ではないか。

出典：吉賀高校、二〇二二c、「聞き書き今年度振り返り」(二〇二二年度報告書)(※2013年訪問時の収集資料)。

学校通信『めたせこいあ』三三三号は、聞き書き発表会に登場した町民の感想を掲載している。

○年配の方は地に足がついた生き方をしている。聞き書きを通して年上の人の生き方を学んでほしい。

○生徒にとっては全く知らないご高齢のところへ、自ら連絡してアポをとって、インタビューすることは、とても勇気が要ることでしょう。高校時代にこのような体験、経験をすることは、必ずや将来の生き方にきつとプラスになることと思います。

○報告はそれぞれよくまとめられていました。ただ発表する声の小さい人があり、聞き取れなかったのは残念でした。あの場で、そのことを言ってくださる先輩の方がおられました。もし、次のような機会がありましたら、しっかりと大きな声で伝えていただければ嬉しいと思います。

○自由という言葉は君たちには一番伝わる言葉だと思います。私は自分で自分の道を選んできたことを後悔していません。選択し、それに責任をもつという自由を得てほしいと思います。

出典：吉賀高校、二〇二二、『めたせこいあ』(吉賀高校学校通信)、(33) (二〇二二年二月号)。

この記事は次に見るように吉賀高校が生徒に対して町民からの期待を伝えること及び高校と町民の交流の発展を強く意識していることのと表れと考えられる(「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」および「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」)。

これ聞き書き甲子園とか出たりしているんですけど、これで子どもたちが地域に出ていくっていう形がスタートしたかな。……子どもたちの活動が地域の人の目にとまる。でもそのことで「聞き書き」ですから地域の方で語る人がいるわけです。その語る人たちも元気になるというような構図が少しずつ形となって出来上がっていきこうとしていて、それでやっぱり広く受け入れてもらえるようになったですかね。出典：第二〇代熊谷修山校長インタビュー

聞き書きは、二年目にすでに吉賀高校の高校魅力化の柱となり、その後、

アントレプレナーシップ教育やビジネスコンテスト参加へと発展し始める。

(二年目に)「結局聞き書きしてどうするんですか?」っていう話になって「じゃあ、二年目どうする?」って話になった時に、……次のステップ、吉賀町にこんないいものがあるってわかったんだったら、そのいいものを使って商売しようと考えました。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」

それから川本町で古本屋やつとつた男性がいますよね? その方にも最初に来てもらいました。それがスタートだったのかな? 「聞き書き」を一年生でやって、二年目は『アントレプレナーシップ教育』にしようと、だから「聞き書き」でいいものを知るんだから、二年目はそれを使って何かをするという生徒の能動性、それが主体性になるという所ではあるんですけど、それを引き出すと。そうすると子どもが「吉賀町ってこんないい所があるんですよ。」「じゃあそれを使ってまた商品開発とか、観光開発とかそんなことをしようや。」っていうことになって、二年目のその時にビジネスコンテストに出したんです。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」

以上見たように、聞き書きは吉賀高校の地域課題解決型学習の原型であり、四年後の二〇一七年度に学年をまたいで授業を統合したアントレプレナーシップ教育の一年生の授業に位置づけられた。聞き書きは生徒が地域に出て行くという形式の出発点であり、住民が高校に関心

をもったり元気になったりする出発点であり、高校生が吉賀町に関心をもつことの出発点であった。

## 9 吉賀高校魅力化の特徴

——試行錯誤と終わりのない問い直し——

吉賀高校の二〇一一年度以降の高校魅力化の事例では、吉賀高校はカリキュラム・マネジメントをずっと続けている。普通科教育を問い直し続け、吉賀高校の使命を問い直し続け、そして地域との関係を問い直し続けた結果、現在の吉賀高校版の高校魅力化に至っている。そして問い直しは続いている。なお、二〇一六(平成二八)年の中央教育審議会答申でも「社会に開かれた教育課程」はカリキュラム・マネジメントとセットで提唱された(中央教育審議会二〇一六)。

今の吉賀高校からは想像できないが、魅力化の当初は「お金があるからそれのできるものを作ろう」という様子だったという。

その時の吉賀高校の魅力化の取り組みは、部活でTシャツ作って中学生に配るとか、校名の入ったクリアファイル作ったりとか、ペン作っていたのかな? 何かそういうネーム入りの、ノベルティグッズを作るような、とりあえず「魅力化」として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれのできるものを作ろうというような流れだったかな。

出典:「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」



吉賀高校の高校魅力化は試行錯誤と問い直しの歴史であった。島根県の助成事業がスタートした翌年には、第六節で見た合計二〇もの取り組みにチャレンジしている。以下、要約して再掲する。

- (1) 中高一貫教育関係の取り組み (①「中高一貫教育だより」、②中高合同水質調査、③よしか塾の開催、④中高合同ロードレース、⑤科学フェスティバルの開催、⑥中高合同地域巡検、⑦合同柔道教室、⑧教員研修の実施)
- (2) 学校行事の取り組み (⑨よしか祭・音楽祭の開催)
- (3) 教育内容に関わる取り組み (⑩各種キャリア教育講演会、⑪地域活動の展開)
- (4) 部活動に関わる取り組み (⑫校外遠征の実施)、⑬活動実技レベルアップ事業の実施)
- (5) 生徒募集・魅力PR (⑭学校案内の作成、⑮「広報吉賀」内での『サクラマス・プロジェクト』PR紙面の確保、⑯ノベルティの作成、⑰ホームページの更新、⑱学校PTA総会での広報活動)
- (6) その他 (⑲部人材の活用、⑳「吉賀発サクラマス・プロジェクト助成金」)

このような「それができるものを作ろう」というエネルギーや二〇の取り組みにチャレンジしようというエネルギーを「問い直し試行錯誤し続ける」エネルギーに発展させた大きなきっかけは「聞き書き」を行ったことであった。

「聞き書き」は一人のコーディネーターが提案し、過去の経験からその提案に感じるものがあつた太田校長や魅力化担当の熊谷教頭が賛成

して始まったのである。その後、聞き書きの実践を毎年新しくしながら、吉賀高校は普通科教育や吉賀高校の問い直しを継続し、今日につながる改革改善の方向と方法を見いだした。問い直しの過程は本稿で紹介したほか、地域人材育成研究会の『地域人材育成研究』第5号に所収されている「第一九代齋藤雅典校長インタビュー」や「第二〇代熊谷修山校長インタビュー」、「第二一代渡部俊郎校長インタビュー」を参照されたい。

吉賀高校の試行錯誤と継続的な問い直しは高校魅力化に用いる資源を育て、拡大させた。この観点から、吉賀高校が用いることができる資源の拡大を考えてみよう。

まず、利用できる組織や仕組みは、当初、中高一貫制による中学との協働があつた。当時の地域学校協働の資源はフォーマルな「吉賀高校振興会」であつた。その後「聞き書き」等の実践を通じて地域の側のインフォーマルな声を取り込んでいる。この機運の中で「吉賀高校応援隊」が発足し地域と高校のインフォーマルな協働が生じたのは二〇一四年であつた（第二〇代熊谷修山校長インタビュー）。吉賀高校応援隊には校外での活動を支援してもらつたという（第一九代齋藤雅典校長インタビュー）。その先にある吉賀町住民との本格的な協働は高校魅力化のさらなる継続と発展を経た後であつた。

コーディネーターの資源については、吉賀高校は第一八代太田校長の時代に二人の影響力がある人材を得ることができた。この二人の人材が聞き書きの取り組みを可能にしたといえる（第二〇代熊谷修山校長インタビュー）。なお、地元出身で他出経験もあり、地域との関係が深い（町内の保育園勤務の経験があり高校生を小さい頃から知って

いる）人材でもあり、そして私たちのような都市部の研究者のメンタリティにも通じているSコーディネーターは太田校長が離任した後に着任している。

資源としての大学教員は、今日では複数の大学教員が吉賀高校の魅力化に関与している。我々地域人材育成研究会のメンバーも含めて、関与のきっかけは高校や町が公的に（あるいは計画的に）招聘したものでない。吉賀高校の高校魅力化の取り組みに関心を持ち訪問を繰り返す中で関与するようになったのである。

近年、募集対策の手段として高校魅力化を始める高校の中には、寮を作り県外生募集を行つたり、公設塾を設立することが定番化している。また、地域を教育の資源として活用することで総合的な探究の充実や「探究学習」の充実を改革の目玉とする高校も増えている。

しかし、本稿の考察が示唆するところは、吉賀高校では終わりのない問い直しと多様な試行錯誤がなされ成果をあげた。とりわけ聞き書きをきっかけに地域学校協働が芽生えたり、キャリア教育と地域特色を生かした教育（や地域課題解決型学習）が深化されたりした。聞き書きはやがてアントレプレナーシップ教育へと発展し、第一九代校長齋藤雅典氏、第二〇代校長熊谷修山氏へのインタビュー（『地域人材育成研究』第5号収録）で語られたように、生徒の学習習慣の改善や荒れの解消という成果、さらには出口指導ではない進路指導や生徒の地域への当事者意識向上や自分自身のキャリアへの意識向上という成果をもたらした。

高校魅力化改革に定義はない。しかし吉賀高校の事例が示唆するところは、今日の高校魅力化では、何をするかを模倣することではなく、

どのように取り組むか、すなわち試行錯誤と問い直しが意義をもつということであった。

引用・参考文献

- 安藤愛・興枳克久、二〇一四、「森林環境教育としての『聞き書き甲子園』の社会的意義とその効果」『日本森林学会誌』九六(三)：一三三―一三一。
- 中央教育審議会、二〇一六、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』(中教審第一九七号)(平成二八年二月二一日)。
- 中央教育審議会、二〇二二、『令和の日本型学校教育』の構築を指して〜全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現〜(答申)』(中教審第二二八号)(令和三年一月二六日)。
- 樋田大二郎、二〇二一 a、「第二〇代校長熊谷修山先生(二〇一六年度〜二〇一七年度)の語り——キャリア教育では「何を」とどこで「ガリアリティ」として重要になる」『地域人材育成研究』(5)：二七―五三。
- 樋田大二郎、二〇二一 b、「第二二代渡部敏郎校長(二〇一八年度〜二〇二〇年度)の語り——(地元の)吉賀町にとって吉賀高校はどうあるべきか常に考えながらやっています。——」『地域人材育成研究』(5)：五四―六九。
- 樋田大二郎・樋田有一郎、二〇一八、『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト——地域人材育成の教育社会学』明石書店。

樋田有一郎、二〇一四、「町存続の生命線としての高校存続。町活性化の最前線としての高校活性化・島根県立横田高校の挑戦」『青年問題』61(655)：四二―四七。

樋田有一郎、二〇二一 a、「第一九代校長齋藤雅典先生(二〇一三年度〜二〇一五年度)の語り——最初は、やること自体が目的」『地域人材育成研究』(5)：六一―六六。

樋田有一郎、二〇二一 b、「人口減少県の高校魅力化から全国の普通科の特色化・魅力化へ——どのように離島の高校改革が全国の高校改革に展開したか」『山陰研究』(一四)：一一―一二別冊。

文部科学省初等中等教育局参事官(高等学校担当)『これからの高等学校教育について』(令和二年一月二五日)。

六日市町史編集委員会、二〇一七、『六日市町史 第三巻』。

島根県教育委員会・島根県高等学校長協会、一九六八、『島根県高等学校教育二十年史』島根県高等学校長協会。

渡辺暁雄・小関久恵・遠山茂樹、二〇一八、『聞き書き』による新たな『物語』へ——歴史記憶世代をつなぐ『場』の創出『東北

公益文科大学総合研究論集：Forum 21』(34)：三三―五三。

吉賀高校、二〇一〇、「中学生の進路選択と中高一貫教育の課題(H二三年四月中高一貫教育基本構想)」。

吉賀高校、二〇二二、『めたせこいあ』(吉賀高校学校通信)、(33)(二〇二二年二月号)。

吉賀高校、二〇一三 a、「5. 課題共有〜もしも吉賀高校が無くなったら〜」『島根県立吉賀高等学校(1期)「離島・中山間地の高校魅力化・活性化事業実施報告」(※2013年訪問時の収集資料)』。



吉賀高校、二〇一三b、「平成24年度離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業実績報告書」。

吉賀高校、二〇一三c、「聞き書き今年度振り返り」(二〇一二年  
度報告書)(※2013年訪問時の収集資料)。

吉賀高校、二〇一三d、「二〇一三年三月地域人材育成研究会訪問  
調査時の説明資料」吉賀高等学校第一九代太田肇校長作成(※  
2013年訪問時の収集資料)。

吉賀高等学校支援協議会、二〇二一、『吉賀高等学校魅力化のあゆ  
み』。

吉賀町、「吉賀町の概要」『吉賀町ホームページ』(二〇二一年八月  
一四日取得 <https://www.town.yoshika.lg.jp/about/shoukai/>)。